

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
 会員向けニューズレター
 発行人 古川 彰久
 事務局 〒252-0321 神奈川県
 相模原市南区相模台1-23-9
 Tel.&Fax.
 042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
 E-mail:info@iki2life.com

1月例会ご案内

日時 : 1月9日 木曜日
 18:30 ~ 21:00
 場所 : 港区立商工会館
 参加費 : 1000円
 テーマ : 城野先生のDVD「東西古今人間学」の鑑賞会 第11回目
 司会 : 古川 彰久

DVD「東西古今人間学」第3巻第6回前半要旨
 <毛沢東に見る人間学>

(1) 毛沢東成功の要因

中国における共産主義の実現において、実際に基づいてやったものはうまくいくが、教条的(教科書に書いてあることをそのまま)にやることはうまくいかない。

(2) 第1次国共合作

国民党が主になって、北の方の軍閥をやっつける。孫文は容共政策を取り、共産党を取り込む。蒋介石は後方で国民軍を掌握する。

(3) 国共分裂

国民軍は、列強からの圧力もあり、共産党を排除し、上海を占領する。これに対し、共産党は朱徳を中心にクーデターにより南昌を占領し、その後井崗山へ逃げ込んだ。これまでの中国共産党は、ソビエトで組織されたコミンテルンの指導の下で、都市の労働者によるプロレタリアート革命を目指していた。

(4) 毛沢東の対応

毛沢東は、農民の中の貧農(小作人)を対象とする。貧農は地主から収穫の70%位を取り上げられ、美しい女性も召し上げられた。そのため地主に対し恨みを持っている。毛沢東はこのような貧農たちの中に入り、地主を捕まえて、金や食料を取り上げる。農民から情報を得ることにより、敵が知らないうちに攻める。毛沢東の軍隊は増えてくるが、他はうまくいかない。国民軍から攻められて、2万

5千里の長征が始まる。江西省を出て、湖南省・貴州省・雲南省を通り、四川省を北上し、甘粛省・陝西省と転戦し、延安まで行った。30万人の軍隊は1万5千人しか残らなかった。毛沢東は実際の力関係において、大きくなった。長征の途上で行われた遵義会議において毛沢東は党の主導権を握り、これまでの幹部はコミンテルンに戻り、毛沢東は中国化したマルクス主義でやる。

(5) 第2次国共合作

延安に着いた毛沢東は、地主と資本家の利益代表である国民党と手を組み、抗日統一戦線を8年間戦った。地主に対する対応も変えた。特にひどい地主は開放対象としたが、基本的には協力するやり方変わった。自力更正を目的に屯田兵。(実際に合わせて変えていく)

(6) 日本降伏と解放戦争

昭和20年8月、日本降伏。中国においては、日本軍は優勢ではあったが、中国も連合国であったので、日本軍は降伏した。

国共合作の目的であった、抗日統一戦線の共通の敵が無くなった。

国民党と共産党との戦いは、共産党から見れば解放戦争となる。

毛沢東は自分に有利になるように連合政府論、新民主論を唱える。

蒋介石が直接掌握する官僚資本はやっつけるが、他の資本家は自分の味方につけた。

地主も悪徳地主と開明地主に分けた。

当時の中国における資本家:

農村にはいないが、都会にはいる。工場を持っている。(蒋介石は良い工場は、接收員を派遣して自分のものにしてしまう。自分のポケットに入れてしまう)

救済物質も当時は主要な部分の半分位は高級官僚に入った。

従い、自分の財産の保障のためには、国民党でないほうが良い。

当初共産党軍150万人、国民党軍600万人に対し、4年後には国民党軍は150万人に減少し、その後の戦役で全滅した。

11月例会報告

日時 : 11月14日 木曜日
18:30 ~ 21:00
場所 : 港区立商工会館
テーマ : 城野先生のDVD「東西古今人間学」の鑑賞会 第9回目
司会 : 石田 金次郎

DVD「東西古今人間学」第3巻第5回前半要旨

(日本の社会と欧米・中国の社会との相違性)

武道において日本社会と欧米或いは中国の社会を見ていくと、日本の武道は一撃の武道(伊藤一刀斎、示現流、真庭念流、宮本武蔵、塚原ト伝など)といえるが、西欧や中国の武道は型の武道(例えばフェンシング、少林寺拳法など)である。

それは、精神構造が違うのであると。欧州では形・組織を作って下に命令(ヒトラー、スターリン、毛沢東など)、多民族国家の米国では生活習慣、考え方が多種多様なので、役務明確、戦術分担明確にして戦略達成するという社会体制、対応の仕方である。米国は第2次大戦の勝利したことを経営学として、その応用を図っていった。が、日本では効果を余り上げなかった。

一方、日本は一民族一言語で教育も普及し、知識程度はほぼ平均化して、戦争への献身や敗戦後の急速な復興が出来たのも、それぞれの人がその目的の戦略を共有ができたからである。

これらを人間学としての受けとめ方については、人間の活動の共通性と相違性を認識することが必要であることである。大英雄といわれるナポレオンは全欧州を制覇したが、これは個人で行ったことでなく、国民軍とそれを支える国民がいて実現したのである。

日本では社会体制の違いからこのような大英雄は出てこないのである。

(ナポレオンにみる人間学)

英雄論についてもその評価は社会的背景を認識したうえで、ナポレオンという人間像を取り上げてみたい。

ナポレオンは大英雄と言われているが、その活躍した社会的条件はどうか。

ナポレオン(1769-1821)が出た社会的条件・背景は、不平等な封建制度で王族・貴族・僧侶が土地を支配しており、農民や商工業者ら人民に重税・搾取に苦しんでいた。そ

して、アメリカの独立戦争への軍事的支援しイギリスと張り合うなどの重税要因もあった。

その一方、商工業者=ブルジョワジーが育ってきたこと、ルソーやモンテスキュー等多くの思想家が体制に疑問を投げかけ、民主的な近代国家体制を提案する社会情勢にあった。

そのような社会情勢の中で、農民の決起、商工業者、都市のインテリが加わり、ルイ王朝を倒すというフランス革命が起きた。

近隣のオーストリー、プロシヤ、イタリアは革命政府を倒そうと対仏同盟を結び対抗して、政府側の軍隊は技術的に優れた傭兵軍を持っていた。革命軍は志願兵からなる農民・市民の国民軍であった。その時ナポレオンは1784年パリの陸軍士官学校で砲兵科を出て1785年には砲兵士官となっていた。ナポレオンは、1793年ツーロン包囲戦でイギリス・スペイン艦隊の支援を受けていた政府軍=反革命軍を、港を見下ろす高地を奪取して大砲で攻撃しその艦隊を追い払い、反革命軍を降伏させる成果を上げた。1795年革命勃発の7年後パリの王党派の蜂起の時には市街戦に対して大砲を撃つという大胆な戦法をとり、王党派の鎮圧に成功し、国内軍司令官の役職を手に入れた。

ナポレオンの名声は上がりイタリー司令官となり、大砲を車に乗せて引っ張ってアルプス(ピレネー)越えて、イタリアを制圧して、イタリーの美術品など膨大な戦利品をもたらした。

当時軍隊は各国とも傭兵が主流であったが、ナポレオンの軍隊は、志願兵の国民兵であった。封建体制のくびきから解放されるために戦略を持ち戦闘意欲は旺盛であった。作戦として、前線に大砲を並べ砲撃後に散兵・寝撃ち後、騎兵を使って一掃する戦法で傭兵の各国の王党軍を押し、欧州制覇の連戦連勝を重ねていったのである。

これまでが、ナポレオンの台頭の歴史的経緯である。ナポレオンは、封建体制の打破を目指した当時の社会的情勢を背景に、志願兵の国民軍という新しいコンセプトの軍隊にあって、これまで他の人が考えつかなかった大砲の使い方を編みだした戦法を使って、戦果を挙げる強力な革命軍を持ったのである。

ナポレオンが大英雄と言われるのを分析してみれば、フランス革命という大きな社会的情勢という背景の中で、欧州制覇といっても国民軍で新しい大砲の使い方を編み出しただけの人物という評価でないのかと言えないわけでない。

(参加者からの感想と議論)

・武道の相違についての感想

柔道の場合、武道かスポーツか、柔道家 JUDO かの議論があるが、日本の柔道は世界標準としての柔道に変わっていった。国際的組織の中に発展的に組み込まれた、そのような型の武道ということか。

サッカーの場合、国際サッカー連盟 FIFA があり、世界にピラミッドを形成している。FIFA の加盟国数は 209 で国連の 193 より多い。組織や競技ルールなど形をなしている。大きな意味で、形、枠組み・組織の運用である。

日本の単一民族、単一言語の社会での組織や形という発想は欧州や中国の精神構造と異ならざるを得ない。グローバルな世界に飛び出して行くことが求められる？

・ナポレオンに見る人間学の感想

時代の変わり目には、武器や使用法などの進歩が関わっている。

ナポレオンの軍隊は、傭兵でなく志願兵の国民軍である。志願兵 1 人 1 人がどうしたらよいかの戦略を適時適所で判断できる能力を共有して軍隊である。それとこれまで思いもつかなかった砲の使い方を編み出した。新しい軍隊のあり方と戦法を実現したということだと思う。

参考までに、ウィキペディアによれば、「ナポレオンが生み出した国民軍の創設。砲兵・騎兵・歩兵の三兵戦術。輜重の重視、指揮官の養成などは、その後の近代戦争・軍隊の基礎となり、クラウゼヴィッツの戦争論に理論化された」とある。

政治思想史でも、フランス革命の理念である自由・平等・博愛；がナポレオン戦争によって各国に輸出された、とある。

・日本にも、火縄銃 3 段戦法を編み出して天下統一を目指した織田信長、天下統一の戦略として時には時間差と科学的計算による武力行使や自尊心・面目などの懐柔策、極力戦いを避け、兵力を大切にした豊臣秀吉、300 年徳川幕府を築いた文治の徳川家康、明治維新を成し遂げた群像がいるが、その人物像も活躍した時代背景があり、その背景を捨象した裸の人物像はナポレオンと一緒にあろう。

英雄は時代が造り出すものであろう！

中国にも、有名な孫子の兵法があり三国志などでも知られているが、戦争の記録を分析・研究し、勝敗は運では無くして人為によることを知り、勝利を得るための指針を理論化している。その特徴は、非好戦的であり戦争を起こすことや長期戦による国力の消耗を戒める。そして現実主義に立ち「敵を知り己を知らば百戦危うからず」などの諺にもなつて、あくまでも、主導権を重視する兵法である。

